

# 本四高速の地域連携事業の取組 「インフラツアーの更なる推進」

本州四国連絡高速道路株式会社

## はじめに

本州と四国を結ぶ3ルート（神戸淡路鳴門自動車道・瀬戸中央自動車道・西瀬戸自動車道）の運営・維持管理を担う本州四国連絡高速道路株式会社（以下、「本四高速」という。）では、インフラを国民が持つ資産として捉え、整備・維持管理・利活用の各段階において、工夫を凝らした新たな取組を実施するという「インフラ経営」の視点から、国民の重要な資産である本四高速道路の潜在力を引き出しつつ、新たな価値を創造することで、瀬戸内地域ひいては我が国全体の持続的な発展を支え、SDGsの達成に貢献していくことを目指しています。本稿では、「インフラ経営」の視点から3ルートを構成する様々な形の橋梁を一つの観光コンテンツとして、一般の方が普段立ち入ることのできない管理用施設や、海峡部の長大橋梁の塔頂などを体験していただく「インフラツアー」の取組について紹介します。

## 明石海峡大橋での展開

兵庫県神戸市と淡路島との間の明石海峡に架かる、橋長3,911メートル、中央支間長1,991メートルの世界最大級の吊橋である明石海峡大橋（写真-1）では、「明石海峡大橋ブリッジワールド」という名称で、実際に明石海峡大橋の建設に携わったツアーリーダーが自身の経験や知識を交えてガイドをしながら主塔まで案内するツアーを2005年より実施しています。新型コロナウイルスの感染拡大に伴う中止期間をはさみつつ、2023年までに累計14万人以上の方々にご参加いただいています。



写真-1 明石海峡大橋

ツアー内では、まず、本四連絡橋の建設に使われた架橋技術の学習や広報の場として設置した施設「橋の科学館」にて、本四連絡橋の建設技術をご案内します（写真-2）。その後、明石海峡大橋に隣接して建設された回遊式遊歩道「舞子海上プロムナード」を経由して、橋桁へつながる階段を下ります。車両通行道路の下部に敷設された、通常は維持管理のためにスタッフが通行している海上約50メートルの管理用通路（写真-3）を1キロメートルほど歩き、明石海峡大橋の主塔に向かいます。管理用通路の床はグレー



写真-2 橋の科学館



写真-3 管理用通路

チングと言われる金属の格子状の構造でできており、真下の海や航行する船を上から見て楽しむことができる一方で、中にはその高さから怖さを感じてしまう参加者もいます。主塔に到着し、関係者用エレベーターで2分ほどかけて98階の塔頂部まで向かうと、海上約300メートルの塔頂から神戸と淡路島に囲まれた瀬戸内海の360°の壮大なパノラマ風景を楽しむことができます（写真-4）。

また、2022年から2023年にかけては、神戸側の主塔のエレベーターの改修工事のため、淡路島側から開始するツアーを実施していました。淡路島を起点としたことから、（一社）淡路島観光協会と「明石海峡大橋ブリッジワールド」とクルーズをセットにしたツアーを造成するなど、新しいつながりや事業の方向性を広げ、地域の魅力発信に取り組むことが出来ました。



写真-4 明石海峡大橋の塔頂からの風景

## 他の橋梁での展開

同様の長大橋の塔頂体験は来島海峡大橋（写真-5）でも実施しています。来島海峡大橋につきましては、2019年度に、国土交通省が設置した「インフラツーリズム有識者懇談会」が立ち上げた「インフラツーリズム魅力増進プロジェクト」において、社会実験を実施するモデル地区として選定されました。

環瀬戸内海地域の経済界、自治体等で構成されている環瀬戸内海地域交流促進協議会の取組を活用し、現地での協議会を経て、四国地方整備局、愛媛県、本四高速等で構成する「来島海峡大橋インフラツーリズム推進会議」が設立されました。その枠組みの中で、安全管理対策やガイドの整備など事業基盤の構築を行うとともに、民間の旅行会社の参画のもと、高単価な橋巡りツアーやブリッジマリッジクルーズなどのテーマ性の高い商品造成にも挑戦し、2022年度まで検証を実施しました。2023年から本格的に事業を開始し、地域の事業者と協力して、日本三大急流のひとつ「来島海峡」の急流、瀬戸内の多島美の絶景や来島海峡大橋を真下から見る貴重な体験ができる来島海峡遊覧船とセットにしたツアーとして開催しています（写真-6）。

塔頂が難しい大鳴門橋では眼下の渦潮を見ながら管理用通路を歩くツアーを「ウォーク」イベントとして実施してきました。

これらのツアーは、たいへん人気のある観光コンテンツとして地域に定着しています。



写真-5 来島海峡大橋



写真-6 来島海峡大橋の塔頂からの風景

## 多様なパートナーとの協力

こうしたインフラツアーの実施に当たっては、インフラツアーを単独で実施するだけでなく、瀬戸内地域の魅力あるコンテンツと組み合わせることで、より付加価値の高い広域観光商品やお客様の満足度の高い商品の造成を目指していくこととしており、様々な主体と試行錯誤を繰り返しています。

2024年2月には、「橋の科学館」が立地する舞子公園を管理する「(公財)兵庫県園芸・公園協会」による特別ツアー「究極の橋泊ツアー」が実施されました(写真-7)。その名のとおり、「橋」に宿泊いただくツアーで、「舞子海上プロムナード」における宿泊を中心に、通常体験することが出来ない明石海峡大橋におけるサンセット・サンライズ鑑賞や、その他登録有形文化財でのディナーやチャーター船での明石海峡大橋見学など、舞子・明石周辺の各種コンテンツを活かしたツアーとなっており、本四高速も連携してツアーの実施に協力しました。1泊2日・参加費297,000円のツアーとして設定し、インバウンドの参加者も見据えたPRが行われましたが、参加者は定員50名中、4名と振るいませんでした。この経験を踏まえて、3月に実施した「絶景!舞子 Sunset & Night」では、明石海峡大橋の管理用通路から沈んでいく夕陽を鑑賞した後、「舞子海上プロムナード」からの夜景と特別なディナーを楽しむ内容のツアーを、日帰りかつ参加費を抑えて設定した結果、開催日両日ともに定員40名が満員となるお申込みをいただきました。

また、2023年は、瀬戸大橋開通35周年を記念して、JR四国との連携協定事業として、「瀬戸大橋」「瀬戸大橋線」35周年スペシャルツアーを開催しました。普段は立ち入ることが出来ない瀬戸大橋管理用通路上から列車撮影体験をお楽しみいただけるツアーを開催し、即座に完売となりました。(写真-8)



写真-7 「究極の橋泊ツアー」



写真-8 「瀬戸大橋」「瀬戸大橋線」35周年記念  
スペシャルツアー

このように、多様な主体が様々なコンテンツを持ち寄り、より付加価値の高い、魅力あるサービス、商品と一緒に作り出していくこととしています。

その一環として、2022年から、旅行代理店や宿泊事業者、旅客船・クルーザー等の運送事業者や美術館など多様な主体から塔頂体験ツアーとの組み合わせのアイデアを求めることとし、企画提案型ツアーを公募しました。提案の中には、地元の商業高校の生徒が案内する島々をめぐるツアーの中に塔頂体験を組み込むもの、美術館鑑賞と組み合わせるものなど、本四高速だけでは企画、実施できないようなものも少なくありません。来年に迫る大阪・関西万博に向けて、インバウンドを含めたお客様をいかに関西以西に呼び込むかは近畿圏のみならず、中四国地方、瀬戸内地域にとっても大きな課題です。大阪・関西万博を見据えて、世界に誇りうる長大橋群のインフラツーリズムの観点から、明石海峡大橋や来島海峡大橋その他の塔頂体験をどう活かしていくか、地域の皆様と一緒に追究していきたいと思っています。

また、インフラツアーは単に観光促進のみならず、地域の貴重な資源としての活用も探っています。例えば、瀬戸内しまなみ海道の多々羅大橋の塔頂体験は、尾道市の「ふるさと納税」の返礼商品として登録しています。

さらに今後、橋梁を活用したインフラツーリズムを展開する機関同士が連携するネットワークの構築を検討しています。運営体制の強化・管理との両立・情報発信の強化等を図ることで、各々のインフラツアーの高付加価値化を実現させ、インフラツーリズムを活用した地域活性化に寄与することを目的として掲げ、現在は、インフラツアーの実施実績がある事業者にお声かけを行いながら、設立に向けて準備を進めています。

このように、インフラツアーを通じ、様々な形で地域に貢献できる姿を探っていきたいと思っています。

## おわりに

本稿では、高速道路会社として、「インフラ経営」を実践する観点から、本四高速がどのようなことに取り組んでいるかを紹介しました。これらの取組は、瀬戸内地域という限られた地域に立脚しなければ存立し得ない我々だからこそできる取組でもあり、これらの取組1つ1つが、地域に認知され、浸透されるよう取り組んでまいります。

世界に誇る多島美を有する瀬戸内の多様な魅力が広く内外に知れわたり、瀬戸内を様々な形で訪れる方が増加すれば、それは地域の活性化、地域の発展につながっていきます。また、観光のみならず、文化・芸術、環境、コミュニティの維持・存続等、様々な側面から地域を支えていくことは地域全体の持続可能な発展に資するものでもあると考えています。

今後とも、我々のできる取組を着実に1つ1つ積み重ね、インフラツアー事業の更なる発展に貢献しつつ、地域とのつながりを深化・発展させていくことにより、地域に必要とされる企業を目指します。